

海外経済 ～資源国カナダの死角、通貨高の悪影響～

経済調査部 桂畑 誠治

続くカナダドル高

カナダドルは対ドルで2001年のボトムから直近高値まで46.3%上昇し、貿易収支がほぼ均衡していた1977年12月以来の高い水準となった。高止まりする原油価格と西部のアルバータ州を中心にオイルサンドが埋蔵することから、カナダが注目されている。ただし、このような大幅なカナダドル高は、エネルギー高によって好調が続くカナダ経済に悪影響を与える可能性がある。

足下内需主導で成長ペース加速

カナダ経済は、2003年4-6月期にSARS（重症急性呼吸器症候群）、BSE（牛海綿状脳症）問題等によって一時的にマイナス成長に陥った。しかし、SARS問題の収束、米国景気の堅調さを背景に2003年10-12月期には成長ペースを取り戻し、足下2006年1-3月期のGDP成長率は前期比年率+3.8%（10-12月期同+2.6%）と高い伸びとなった。個人消費は5月の失業率が6.1%と1976年1月以降の最低水準を更新するなど雇用環境が良好なこと、長期金利が低い水準にとどまっていること、株高等によって堅調さを維持している。設備投資も、機械や建設投資主導で拡大している。その中には、オイルサンド（原油が吸着した砂の層）での増産投資も含まれている。オイルサンドは採掘コストが高いため原油価格が低い時には生産が抑制されていたが、原油価格の上昇によって採算ラインを大きく上回ったため、積極的な増産投資が行われている。以上のように、内需の好調に支えられカナダ経済は堅調さを維持している。

米景気減速下でのカナダドル高はエネルギー関連以外の製造業の脆弱化リスクを高める

外需に目を向けると、エネルギー・商品価格の上昇によって、エネルギー・素材関連の輸出は増加した。しかし、カナダドル高の進展によって輸出全体では伸び悩んでいる。加えて、内需の堅調さを映じて輸入の拡大が続いたため、純輸出は3四半期連続で赤字となった。通貨高による価格競争の激化によって競争力を失った製造業では2005年以降雇用が大幅に減少している。

今後、商品価格は世界的な景気減速によって一旦落ち着く可能性があるものの、2005年のGDP規模で世界第4位となった中国が2006年も二桁の成長を続けると予想されるため、高止まりすると予想される。他方、原油も地政学的なリスクに加え、OPEC（石油輸出機構）は戦術的に減産を行う可能性が高いため、価格が維持される可能性が高い。さらに、これらを背景に、CPIは5月に前年同月比+2.8%とBOC（カナダの中央銀行）の許容範囲である1%～3%の上限付近まで加速したため、追加の利上げの可能性もある。このような状況のもと、一段とカナダドル高が進むと予想される。

加えて、カナダの輸出額全体に占める米国向けシェアは、2006年4月で80%と引き続き高く米国経済に対する依存度は高いままである。今後、米国経済の減速によって、米国向け輸出が鈍化する可能性がある。市況高等によるカナダドル高と米国経済の減速との同時進行によって、エネルギー関連以外の製造業が脆弱化し、市況に影響され易い経済構造に陥るリスクが懸念される。

かつらはた せいじ（主任エコノミスト）